

ネズミ浄土・隠岐郡隠岐の島町上那久

令和3年3月30日掲載予定

収録・解説・酒井 董美<sup>たまたま</sup> イラスト・福本 隆男



語り手 大滝忠敬さん（明治38年生まれ）  
収録・昭和52年7月31日

あらすじ

昔。あるところにな、じいさんとばあさんがおった。「ばばよ。今夜は焼き餅焼かあや」  
囲炉裏で焼き餅を焼き、腹いっぱい食ったげな。ところが、一つ残った。「ばば、食えな」「じいさん、食わっしやい」。譲り合っていると囲炉裏の隅の穴に転がりこんだ。  
じいさん、尻からげて、囲炉裏の隅この穴からもぐって行ったが。途中に地藏さんが立つとる。「なんと、地藏さん。ここを焼き餅が通りやせだつたかの」「うん、さつき通ったわ」「そうですか」。  
次々地藏さんが立っているので二体目の地藏さんは「あんまりうまさげなもんだけんなあ、一口かじってやったわい」と言う。  
じいさん、それからまた一生懸命で追っかけて行った、何やら音がする。  
「猫さや来ねば、国やわがもんだい。ストンカタン」。

ストンカタン。と言つて、ネズミが、米つちちよる。  
じいさん、物陰から、「ニャオー」と…、何とネズミがおびえまいことか。  
「そら、猫が来た」つていうので、みんな一目散に逃げつた。後には米がどっさり残つて、じいさんはその米を臼からすくい上げて、戻つてきた。  
これを聞いた、隣におった欲の深いじいとばばが「われわれも一つやってみるか」「うん、よからあ」  
囲炉裏の側の穴の中に焼き餅を入れてやった。  
じいさん、尻つば（尻からげ）して、後から追っかけていったわい。  
それから、三番目の地藏さんを通つて行つたところが、ネズミが、  
「猫さや来ねば、国やわがもんだい。ストンカタン」  
ストンカタン。  
つて白つちちよるわい。  
じいさん、物陰から、「ニャオー」つて、猫の鳴き真似をしたところが、  
「そりや、また夕べのじいが来た。今夜、敵討ちやるか」

「よかるう」と言うので、ネズミがバラバラバラッと飛び出してきて、じいの足や手に食いつくやら、身体中あっちこつちへ噛みついたので、じいは血だらけになつて、米どころかほうほうの体で戻つてきたちよ。  
その昔のストンカタン。

解説

隠岐地方の特色を述べると、まず隠岐型として島前地区（海士町、西ノ島町、知夫村）、島後地区（隠岐の島町）に共通しているのは、爺と婆が焼き飯（チャーハン）ではなく、隠岐独特の小醤油味噌を焼いて握り飯の上に乗せしめたものを、現地では「焼き飯」と呼んでいる。（を二人で食べるが、一個余り、それをお互いに食へる）ことを譲りあう点で「謙譲型ネズミ浄土」である。  
次に島前地区では、畑や漁に出かけたりなど、屋外で焼き餅を食べる屋外型であるのに対し、島後地区では家で焼き飯を食べる屋内型である違いを持つているのである。（元島根大学法文学部教授）